

安部公房から見たユダヤ人作家としてのカフカ

—都市の中の虚構としての農民性—

Kobo Abe's View of Kafka as a Jewish Writer: Agrarianism as Fiction in the City

須藤 勲†

Isao Sudo

Abstract This research uses Abe's understanding of Kafka in order to compare the works, ideals and lives of the two authors. Abe was critical of the deep attachment to "agrarian consciousness" even in modern developed countries where life is based in the city, and sympathized with the "urban" and "heretical" values of Jews living in Europe, including Kafka. Both authors wrote about human life in contemporary society. In society today, people's words persist as information, and the information circulates away from the control of the individual, as other "selves". They wrote about the conflicts between the individual and these other selves. As a German-speaking Jew born in Prague, Kafka did not have a spiritual homeland, and Abe, who was born in Japan and grew up in Manchuria, thought of himself as also being without a homeland. With such similar backgrounds, both writers often portrayed characters who did not properly belong to society. Because he lived in the city and was a Jew without a connection to the land, Kafka was fascinated by rural villages and agriculture, and in his later years considered emigrating to Palestine, the historical homeland of the Jews. However, he ultimately continued living in the city, with literature as his emotional support. Abe, on the other hand, explored the meaning of statelessness, and in his later years, became interested in Creole cultures.

0. はじめに

フランツ・カフカ(1883-1924)と安部公房(1924-1993)の作品の比較研究はこれまでも多く行われているが、両者の作品には共通する点が多く、それは表面的な類似にとどまらず、作品や作家の思想の根底に流れるものに及んでいるといえる。本論では、カフカと安部の作品および思想について、両者に共通する問題を提示しながら考察を行う。その際、安部のカフカ理解をもとにしながら、カフカ作品を読み、また安部の作品と比較することで、その特質を明らかにしていく。二人に共通しているのは、ともに「現代」を描き出した作家であったということである。カフカは第二次大戦前に亡くなっており、安部は戦前・戦中に育ち、戦後に日本で活躍した作家である。両者の持つ背景は異なっているが、カフカはヨーロッパに住むユダヤ人としていち早く「現代」を獲得していた(触れていた)作家であったといえるのかもしれない

い。安部は、1963年のオーソン・ウェルズの映画『審判』について述べる中で、「いわゆる“カフカの状況”が普遍的になっている現実」(全集 19『映画<審判>のもつ現代的意義』p.20.)¹⁾が、現代にはあると見ている。安部にとって、カフカは重要な作家であった。彼は、何度かエッセイや対談の中でカフカについてふれており、短いものから比較的長いものまで、カフカの名前が出てくる回数は、他の外国の作家に比べ多いといえる。

安部のカフカ観については、二つの点が挙げられる。まず、現代の都市における人間像を描いた作家であったこと。そして、都市に住み、故郷を持たないユダヤ人であったことである。エッセイ『内なる境界』(1968)で、安部はユダヤ人の問題について述べる中で、カフカについて触れている。安部はユダヤ人作家としてのカフカに、当時の関心事であった「内なる境界」という概念を重ねている。彼は、現代の国家が、都市を基盤として成立しているながら、未だに幻想のような農村、農民性を求めていることを批判している。それは「大地信仰」(全集 22

† 愛知工業大学非常勤講師

『内なる境界』p.206.)であり、そこに所属しない者、異端者を作り出すことになる。そして、長い間土地への所属を持つことのできなかつたユダヤ人たちの運命に、そのような異端性を見出している。安部は、カフカをはじめとするユダヤ人を、都市的人間であると定義する。ユダヤ人には、土地に所属すること、そして農民として生きることが難しかったのであるとしている。それは、土地へのつながりとは無縁の、都市に生きる根無し草の状態を意味している。安部がカフカに感じたものとは、この都市性であり、そこに現代を見たのである。安部は「大地信仰の文学」(『内なる境界』p.228.)に対する異端としてのカフカを評価している。

以降の節では、安部の主張をもとにカフカの作品を読み、また安部の作品との比較を行っていく。まずカフカと安部の作品に共通している「都市性」と、次にこれも共通しているといえる土地、故郷とのつながりの希薄さの問題について考えていく。

1. 都市の中の間人像

カフカの未完の小説『訴訟(審判)』(1914)と、安部の小説『S・カルマ氏の犯罪』(1951)においてテーマとなるのは、現代社会における人間と社会との関わり、あるいは社会の中での人間のあり方についてである。この二つの作品に関しては、その内容的類似から、佐々木基一、有村隆広などにより、比較研究が行われている。有村が指摘しているように、『訴訟』と『S・カルマ氏の犯罪』(以下『カルマ氏』)には、いくつかの類似した場面が見られる。²⁾ 安部は、すでに戦中にカフカの『訴訟』を読んでいたことが明らかになっている。そのため安部がカフカから影響を受けていたことも推測されるが、安部自身は自作への直接的な影響を否定している(全集 27『カフカの生命』p.60.)。ここでは、安部が直接的にカフカを取り入れたかどうかという問題ではなく、ともに現代を描いた作家である二人の作品に共通するものがあることに注目し、その内容を比較していく。

社会における人間の存在とは、生物学的な身体のみで成り立っているわけではない。その人間の言動が発するさまざまな「情報(個人情報)」も、他人に記憶されたり、文章として記録されるなどして残り、その人間の一部を構成する。それらの情報は、生物としての身体に付随し、社会的身体を構成する。人間は、そのような情報を保存する空間(社会)の中に、自分の情報を拡散し続け、それは本人の代理、あるいは分身のように活動する。明確な形として、文字として残されるもの(名刺、履歴書、そのほか署名入りの文章)や、発言したことや行動が、何らかの形で記録、記憶されることは、ある人間につい

ての、外部における情報の拡散と保存と呼ぶことができる。情報(=分身たち)は、本人の知らないところで、本人の制御を離れて動き回ることもある。例えば、本人の代理となることを期待されて書かれた履歴書は、本人のいないところで利用され、評価されることになる。それは本人の分身として機能するが、実際の本人とは異なる場合もありえる。たとえ間違っただけであろうと、一度社会の中に拡散された分身は、本人の代理とみなされるのである。

拡散された分身のいくつかは、(よい面でも、悪い面でも)ある日突然本人のもとに帰ってくることもある。悪い面でのわかりやすい例は、犯罪行為である。過去の行動が法律に違反していたから、後の逮捕が生じることになる。それは、逮捕された人間から見れば、過去の行動によって生み出された情報(記録、他人の中の記憶)が、現在において作用し、自分のもとへ帰ってきたことを意味している。

カフカの『訴訟』では、主人公ヨーゼフ・Kが、ある朝、正体不明の裁判所から来たという男たちによって、逮捕を告げられる。作品は、「誰かがヨーゼフ・Kを中傷したにちがいない、なぜなら彼は何も悪いことをしていなかったのに、ある朝逮捕されたからである。」³⁾ という文から始まる。見知らぬ男たちが現れ、Kを逮捕したのであるという。しかし、Kには身に覚えがない。Kの逮捕とは過去の言動によって生み出された分身(Kに関する記録)が、何らかの作用の結果(犯罪行為であると判断された結果)、罪として回帰してきたことができる。それはKに関する情報として社会的身体を構成する要素であるはずだが、Kにとって身に覚えのないもの、見知らぬものであった。Kは、逮捕を理由のないものと主張する。それはあり得ることで、複雑な回路を持つ社会の情報の流れの中で、誤認逮捕されたとも考えることも可能である。実際、最初の予審で、予審判事はKの情報について確認する際、彼の職業を「室内塗装工」⁴⁾ であるという。それは銀行員であるKからすれば、間違っただけの情報であり、このことから彼は裁判所という組織を信用できないものとも考えることになる。いずれにせよ逮捕とは、「罪あるヨーゼフ・K」というもう一人のKが現れたことを意味する。そのときKには、その分身を否定するか、肯定し自分であると認めるかという選択が生じることになる。そして彼は「それは自分ではない」と否定することになる。ここに見られるのは、K自身の中にある自己像と、他者(社会)の中に拡散され作用し形を変えてきたKの出会いであり、それはK本人から見れば互いに異なっていたため、自分の一部であると認めることができなかつたのである。

『訴訟』における「過去の言動の回帰」をより具体的に見たとき、それは「訴訟の記録」として現れている。逮捕の理由については、Kが出会う裁判所の人間たちには説明することができない。弁護士フルトが伝えるところによると、訴訟に関する記録書類は非公開であり、当事者である被告ですら見るできないという。しかし裁判所の人間たちの行動の背景にあると考えられるのが訴訟の記録であり、それがどこかに保管されていることが作中で暗示されている。訴訟の記録は読むことができず、それはある特定の誰かによって作られたものなのか、知ることができない。それは一つ特定の原因があるというより、Kがそれまで拡散してきた情報が複雑に作用した結果としての複合的なものとも考えることもできる。訴訟記録とはKに関する書類であり、社会において分身として機能するものであるが、Kはそれが間違っていると考え、その信用性を否定し、無罪を主張することになる。しかし終章では、彼は抵抗することなく処刑される。⁵⁾ それは「罪あるK」とK本人とが一体化したのだということができる。

『訴訟』に見られたのは、拡散された情報（分身）と、その源であるはずの本人との関係である。分身は、本人のいないところでも残り続ける。その自分から離れたはずの分身に関しても、本人は責任を持たなければならない場合もあるが、一方分身は人々の間（社会の中）を動き回り、それを制御することは困難である。

分身の制御不可能性、これは安部の作品集『壁』に収録された作品『S・カルマ氏の犯罪』でも見られるモチーフである。ここでは、『訴訟』に見られた構図がより明確となっている。この作品は、主人公カルマが朝目覚める場面から始まっている。『訴訟』のKと同じように、彼は違和感を持つ。彼は、なぜか分からないが通常でない食欲を感じ、多めの朝食をとる。そして、自分の名前を忘れてしまっていることに気がつく。それは、単に忘れてだけではなく、自分の持ち物（書類や背広など）に書かれていたはずの名前が消えており、名前が「なくなった」のだということだと分かる。サラリーマンである彼は、会社に向かうが、そこで自分自身に出会う。それは人間のものであるが、よく見ると紙でできた名刺であるという奇妙な存在であった。カルマという人物の名刺が、本人の代わりに、職場で本人の意思とは関係なく勝手に行動していたのである。ここでの名刺とは、社会の中で本人の代理として機能するものとしての「情報」を代表するものとみなすことができる。名刺とは、社会の中で大量に複製され、自身の情報を相手に保有させるために配られるものである。名刺とは分身として機能することを期待して利用されるものであるが、その分身をカルマはコントロールすることができない。ここでも、

「情報」の自律の問題が見られる。情報が、本人に対して反乱を起こした状態である。

ここでは、生身の人間より、その人間の肩書きや所属が重視される社会に対する批判、つまり疎外された人間の状況を描いていると読み取ることもできる。カリーの『疎外の構図』⁶⁾では、カフカ、安部、ベケットについて、「疎外」をキーワードとして論じられているが、ここでは、カルマは社会の中で労働力としての外面と、内面とに分離してしまったとみなすことができる。そのとき、内面は必要とされない。

『カルマ氏』では、分身の拡散と制御の不可能性が描かれているといえる。それが、現代に生きる人間のあり方である。カフカと安部の作品で描かれるのは、人間の主体がどこにあるのか、人間の外面と内面との関係の問題である。それは、21世紀の現代でも、あるいは、電子情報が世界を巡る時代となった今だからこそ、一層重要な問題である。⁷⁾ 人間が情報と化すことは、昔からあり得たことである。しかし、外部の情報と本人の一致が容易であったような、小さな共同体の中に人が生きていた時代と違い、近代以降の、群衆として都市的環境に生きる人間は、外部の情報と本人とに分裂し、その一致が難しい状況にある。カフカと安部が描く「現代」では、そのような情報の制御の不可能性が明確になっているのである。

2. 名前の問題、断片としての人間像

『訴訟』と『カルマ氏』に共通しているのは、ともに「名前」が重要であるという点である。先節では、拡散された情報と本人との関係について見てきた。それは、生身の身体を持つ人間が、どのように社会的な存在として生きているのかについての考察であった。しかし、社会において人間を構成する中心となるのは、身体だけではない。その人間の身体に付随するはずであった情報のいくつかも、まるで中心（その人間の本体）であるかのように機能しているのである。その代表となるのが、名前である。

安部の『カルマ氏』では、主人公は名前を失う。一方、カフカの『訴訟』では、ヨーゼフ・Kという名前が基準となる。彼は名前のもとに逮捕され、本人との一致も考慮されないまま、裁判が生じる。Kは作品の中で、誰もが自分の名と裁判について知っていることを、いとわしく思うようになる。ここで問題となるのは、社会における無名性と、名前が拡散し無名性を失うことの、二つの名前のあり方である。『訴訟』は、主人公が「有名」になる物語、『カルマ氏』は文字通り主人公が「無名」になる物語といえよう。

『訴訟』では、それまで、社会の一員として目立つこ

ともなく生きていたKが、逮捕された後には、出会う人みなKのことを知っているという状態になる。Kは、その名前から逃れることができない。彼は、カルマ氏と違い名前を失うことはないが、しかし訴訟の過程においては、それまで名前の持っていた役割は失われ、変化している。逮捕された朝、彼は自分の身分証を提示するが、それは考慮されることもない。彼は、銀行の高い地位にいる、比較的、社会的地位のある人間であるが、そのような事情も、裁判所との関係では考慮されない。Kは、その名の下に生きるとき、裁判にかけられ、罪を宣告されることになる。

『訴訟』のKが、その名前のもとに裁判が行われようとしていたのに対し、『カルマ氏』では、名前がないままに裁判が行われていく。安部が、都市の生活の特徴として、「無名性」(『内なる辺境』p.227.)を挙げているように、本来無名性、匿名性とは、互いを知らない者同士がともに暮らす空間としての社会の基本的特性である。そこでは、人は名を明らかにすることと、無名であることを使い分けることで生きている。無名であるからこそ、安心して他人と接触もできるはずである。そのような意味で、顔見知りばかりで構成される小さな共同体とは違い、現代の社会とは、無名の人間の集まりとすることができる。しかし、本当の無名人間が現れたとき、そこには混乱が生じる。名前を失うということは、社会の中で制限された生しかおくることができないはずである。銀行に預けている金も、免許証などの証明書も、すべて名前がもとになっている。名前とは、個人の身体を社会と結びつける接点として機能しており、社会的身体的基础となっている。名前を失ったとき、彼はそれまでの生活、つまり社会的な「生」を維持することができなくなる。カルマは、名前を失ったことによって罰せられるが、恐れられもする。名前を失ったことによって空虚になった主人公は、あらゆるものを吸い込む可能性を持つ。名前がない主人公は、名前がないせいで、すべての罪に関わっている可能性を指摘されてしまう。(これは、Kが、Kの名前のもとに罪を突きつけられ、逮捕されたことと逆である。) 作中、マネキン人形がカルマに助言を与える。「あなたが名前を取り戻すまで、有罪でも無罪でもない曖昧な状態で裁判は永久に続き、そのあいだ起こったすべての事件がことごとくあなたの罪状として加えられていくわけですから。もしあなたが名前を取り戻せば、まず死刑はまぬがれない。」(全集2『壁』p.428.) 名前を失った男は、社会への所属を失ったのであり、「名前のないものに法を適用するわけにはいかぬ」(『壁』p.405.)といわれ、「人権保護法の適用外」(『壁』p.440.)の存在となる。名前を失い、社会への所属がない男は、社会か

ら去るしかない。彼は小説の終わりに、「世界の果」へと向かうことになる。

都市における無名性の問題は、安部の小説『箱男』(1973)にも見ることができる。箱男とは、大きな段ボール箱の中に全身を隠し、そこからほとんど出ることなく路上生活を送る男のことである。箱男は、街の路上を生活の場とし、常に誰かに見られているはずだが、決して話題にされない存在であるとされている。作中では、「本能的に眼をそむけたくなるものらしい」(全集24『箱男』p.16.)のだといわれている。見えていながら、人々は彼ら箱男たちを無意識のうちに無視しているのである。彼らは、段ボールという街中にあふれている素材の中に身を隠すことで、街中に溶け込むように隠れている。その中で、箱男が天敵とするのは、全身にメダルやバッジを付けた「ワッペン乞食」である。彼だけが、箱男を無視せず相手にする(攻撃してくる)。彼は、次のように描写される。「全身を鱗のように、バッジや、ワッペンや、玩具の勲章で埋めつくし、帽子に、誕生祝いのケーキを飾る蠟燭のように、日の丸の小旗をぐるりと立てた老いぼれの乞食。」(『箱男』p.115.) ワッペンやメダル、勲章とは、何らかの集団への所属を意味する記号として機能するはずであるが、それらが過剰に、乱雑に身につけられているとき、記号は無効になる。彼が身につけているのは、彼に関係のない記号=偽のメッセージ、情報ばかりである。その無効性が、彼がどこにも所属していないことを象徴しているといえる。社会における人間が、記号=情報を発している中で、このワッペン乞食は、情報の過剰さの中に身を隠している。社会的記号としてのメダルを、しかも社会的記号を失わせる形で体を覆う男は、目立たないことで隠れる箱男とは逆の意味で、社会から孤立する(擬態し隠れる)人間である。

先の節では、「情報=分身」の拡散という視点から、『訴訟』と『カルマ氏』とを見てきた。情報とは、何らかの中心によって統合されることで、何かを(人間や集団、その他社会的事象)を形作る。つまり断片としての情報が集まることで、社会的身体が成り立っているということである。その情報の中でも、名前とは、人物(あるいは事物)を代表し、統合する要素として機能している。本来断片である情報は、何らかの関係性を見出されることにより、統合される。このような人間的な関係性を、因果関係、あるいは「物語」と呼ぶことができる。人間は、本来関係ないようなことにも関係性を見出し、人間の世界を作り出してきた。社会はそのような関係性を作り出し、物事を統合する糸を自明なもののみならずことで成り立っているが、『カルマ氏』のようにその自明性が失われたとき、安定していた世界は失われる。

安部公房から見たユダヤ人作家としてのカフカ

本来、社会は、あるいは人間は、さまざまな断片的要素が集合することで成立している。社会的身体は、生身の身体のもとに情報が集まって構成されているはずであるが、名前など、本来社会的身体を形成する一要素であったものが、本人自身であるかのように扱われることも、社会ではあり得る。

『カルマ氏』で描かれるのは、分裂する人間像、あるいは断片の集合としての人間像である。名前だけでなく、身につけていたもの（衣服や靴など）まで、自由に動き始める。有村は、名刺と生身の身体とに分離した状態を、「実存に目覚めた S・カルマ氏にとっては、もはやこの世界は因果律に支配される世界ではない」⁸⁾と捉えている。それまでであったはずの因果律、因果関係とは、人間が物事を認識する際の手がかりとなるはずのものであるが、それが失われたとき、彼は身の回りのものを制御することが出来なくなる。有村は、この状態を「ホーフマンスタールに始まり、リルケ、カフカ、ムジール等にみられる<事物の反乱>の文学思潮」⁹⁾と比較している。特に、ここではカフカの未完の初期作品『ある戦いの記録』(1904-1907)における風や水という自然の事物の「反乱」が思い出される。一方、安部の場合、反乱するのはカルマの持ち物である。所有物とは、身体を拡張し、社会に適合するために不可欠な要素である。彼は、自分の所有物=拡張された身体を、もはやコントロールすることができない。また、裁判の場面では、裁判を行うために集まる学者たちは、ばらばらの顔のパーツからなる人間のように見え、「寄せ木細工のような連中」(『壁』p.394.)であると表現されている。この作品では、本来安定しているかに見えた人間が、断片の集合であり、その集合を保証する糸が失われかけていることが示される。カルマが、身の回りの物や、断片である自身を統合する核となっていたはずの名前を失ったとき、事物が反乱を起こす。つまり生身の身体ではなく、名前というものの下に、カルマという人間を構成する要素が統合されていたことが明らかになったのである。

逆にいえば、名前があれば、ばらばらの事物でもつながり、統合される可能性があるということである。カフカの短編小説『父の心配』(1917)の中では、本来「名づけえぬもの」にも名前が与えられている。この作品の中で語られる「オドラデク」とは、動物と物の中間のような存在であり、何とも似ていない存在である。それは、何のためにあるのか、どこから来たものなのかだれも知らず、常識的理解の外にある存在である。オドラデクは、糸巻きのような形をしていて、糸が絡まっているのだと描写されている。しかし、その糸はただ絡まっているだけであり、どこにもつながっていない。この糸は、オドラデクがかつて持っていたはずの、社会とのつながりを

象徴している。しかし、そのようなつながりを示すものが失われている以上、それは、語り手や周囲の人間から見れば、意味を持たない、断片の集まりである。にもかかわらずそれは「オドラデク」という、語源も分からない意味不明なものではあるが、とにかく名前を持っている。オドラデクとは、「全体が、確かに無意味であるように見えるが、それなりの方法で完成しているのである。」¹⁰⁾と語り手によって説明されている。そのまとまりを保証しているのは、何を意味しているか分からない名前だけである。もし、それに名前がなければ、屋根裏にうち捨てられた「何か」だったものの残骸、がらくたとして、誰の興味も引かないものだったかもしれない。その名前にどのような由来があるのか、果たしてそのような名づけ（ある統合したものとみなすこと）が正しいのかどうか、誰にも分からないのである。安部は、事物と言語との関係について、あるエッセイの中で次のように書いている。「言いかえれば言語を媒介にしないむき出しの事物とは、一種の魔境にほかならない。むき出しの事物は、意味をもたない。そこには因果関係も、脈絡も、観念の誘発も連想もあり得ない。」(全集 11『映像は言語の壁を破壊するか』p.452.)ここでは、言葉（あるいは名づけること）によって、むき出しの事物が意味づけられ、因果関係が与えられることについて述べられている。名づけられていないものとは未知のものであり、それに名づけることによって、既知のものにしているのである。名づけることとは、「むき出しの事物」をなじみのものにし、理解できるものにするのである。オドラデクとは、「むき出しの事物」であるかのような、理解不能な存在であるが、一方、それは名前を持っているのである。オドラデクという、ばらばらの要素から成り立つものを（外的に）保証しているのが名前である。名前とは、断片を統合する糸として複数の要素を結びつける働きがある。人間が（あるいは社会が）統合を失うというのは、現代の人間に共通する意識かもしれない。ブラウンによると、断片性、不完全性とは、カフカだけでなく時代の共通意識でもあったという。¹¹⁾彼はオドラデクを、「断片の芸術」¹²⁾の代表的なものであるとみなしている。ブラウンは、カフカの作品の中に現れるものの多くが断片的、不完全なものであるとした上で、『訴訟』の画家ティトレリの描く荒野の風景などの、カフカ作品に登場する写真や絵画が「崩壊した世界の遺物」¹³⁾を描いているのだと解釈した。カフカの世界では、確かに何らかの、かつてあった理想的状態が暗示されているように見える。『訴訟』でも、上級の裁判所という、誰もが夢見るといふ組織が暗示される。しかし作中では、決してそれは現れることがなく、代わりにあるのは、不完全な組織としての下級裁判所でしかない。

安部がテーマとしているのも、小説『燃えつきた地図』(1967)に見られるような、都市における人間の断片的情報としてのあり方とその統合である。この作品で主人公となるのは、失踪した男を捜す探偵である。『訴訟』のKが自分の過去を振り返ったように、探偵も過去をさかのぼり、現在の結果(男の失踪)に対する理由を探る。探偵の仕事とは、ある人間の痕跡としての情報(断片)を集め、一人の人間を再構成することである。主人公は、失踪した男の情報を集める。しかし、いつまでたってもその男を再構成することができない。作中では、「地図」が問題となる。依頼者の弟の台詞として、「人生に必要な地図は、一枚だけ」(全集 21『燃えつきた地図』p.131.)であると語られている。安部は、あるエッセイにおいて、次のように書いている。「人間はだれでも、自分の内部(地図)と外部(現実)をもっているわけだが、日常生活においては、それをいちいち区別せず、ほとんど一つのものとして受け取っている。」(全集 23『古地図の修理』p.413.) 地図とは、外部の現実世界をどのような基準によって統合し、自分の世界として受容するかという方法を意味していると考えられる。日常の中では、通常、そのような「地図」について意識する必要はない。しかし、その地図の自明性が消え、他人とは異なる地図を見つけたとき、その人間は他人から理解できない存在となる。探偵は、失踪した男(「彼」)を探す。しかし、彼が集め続ける情報からは、「彼」の行方は分からず、なぜ失踪したのかも分からない。「彼」の行動原理としての「地図」が分からない、あるいは「読めない」のである。いくら外的な情報を集めてみても、「彼」を再現することは出来ない。作品の中では、「無数の彼」という言葉が使われる。「ぼくのなかの<彼>、彼女の中の<彼>、彼の中の<彼>……」(『燃えつきた地図』p.228.) 「彼」が拡散した情報は、それぞれの人間の「読み方」によって、再構成される。それは、それぞれの人間によって異なるのであり、唯一の「彼」を探すことは出来ない。「地図」=内面であるとすると、探偵は、「彼」の地図を、平均的人間像から割り出そうとする。しかし、平均的地図の上に「彼」が現れることはない。主人公は探偵として、テレビドラマの中の探偵がするように、男を捜そうとする。何らかの刑事事件が関わっているのではないかなというように、シリアスな推理をする。しかし、そのような「探偵」としての捜索では、男に近づくことはない。捜索が進まない中で、彼は次第に「探偵」であることから離れていく。探偵は「彼」を探す中、自分の「地図」の自明性を失っていく。地図が失われたとき、彼は自分が誰なのかも、どこにいるのかも分からない状態となり、街の中で迷うことになる。

3. 所有と所属

名前を失ったカルマは、身の回りの所有物さえ制御することができなかった。それら所有物は、カルマの生身の身体ではなく、名前に所属していたことがここでは明らかになっている。名前を持つということは、社会に所属していることを意味し、そして所属とは、集団(社会)の中で、一定の形を持って受け入れられることである。そして所有することとは、どこかに所属することが前提となる。社会に所属し、そのルールを受け入れたときに、所有も可能となる。このような意味での「所有」ができるのは、人間の特性である。例えば、家を所有することは、動物が巣を守ることは異なる。たとえ家を離れたとしても、所有を放棄したことにはならない。不在でも誰かに家を占拠されないのは、鍵をかけたからだけではなく(それなら、強引に侵入されることもあり得る)、その所有者が社会に所属し、ルールに従うことで、所有が認められているからである。社会とは、お互いに生存をはじめとする社会的権利を認め合う、相互保証のシステムである。その社会に所属できなかったり、制限された所属しか認められていない場合、社会から受けられる恩恵もまた制限されることになる。

所属の問題で興味深いのは、『S・カルマ氏の犯罪』と同じく作品集『壁』に収録された安部の短編『赤い繭』(1951)である。家を求めて街の中をさまよい歩く男は、なぜ自分に家がないのかということが分からなくなる。彼は、もしかするとどこかに自分の家があるのではないかと一軒の家を訪ねるが、狂人のように扱われるだけである。家や土地を所有することは、社会に所属する強い象徴となるが、家の所有ということが理解できなくなった男とは、社会のルールの外にいる状態である。社会で通用しているルールを理解できない男は、警察官を「棍棒を持った男」(全集 2『赤い繭』p.493.)としか理解できない。棍棒を持ち、特定の制服を着ている人間は警察官を意味する、という社会に共有されているはずの記号を読み取ることができないのである。男はどこにも行くところがない中で、突然、昆虫の作り出すような繭へと変身していく。ここでは男自体が繭に変わってしまう。繭は男にとって、「これだけは確実に誰からも妨げられないおれの家」(『赤い繭』p.494.)となる。彼は家を手に入れたことになるが、そこに住むべき人間を失ったのである。社会へ所属せず、そのルールの外にいる男が家を手に入れるためには、自身が家と一体となることが必要だったのである。彼は、所属する対象を持たない男であった。そのため、所属を得るには、自身を、所属する対象としての家自体(繭)に変化させるしかなかった。

安部公房から見たユダヤ人作家としてのカフカ

また『箱男』では、所有と所属に関しての不安な感情が表現されている。「そいつの心配性は度を過ぎていた。ちょっとでも長く部屋を留守にしすぎると、そのあいだに部屋が消え失せてしまうのではないかと、気が気でなく、おちおち外出もしていられないという始末だった。」(『箱男』p.63.)ここでは、自明のはずの所有という概念を信じられなくなった心情が描かれている。この文章は、ある箱男の抜け殻(空の段ボール箱)の中に残されていたノートに書かれていたものである。これは断片的な文章であり、どのような背景で書かれているのか不明であるが、この文章を書いた人物が、後に空の段ボールの主だった箱男になったとも想像できる。箱とは、箱男そのものであり、家でもある。街の中、路上生活者として、どこにも確かな所属と所有を持たない箱男にとって、身につけられる箱だけが、確かな所有物であり、所属する対象でもあった。『赤い繭』では、男は繭=家自体に変化した。ここでは、箱が家であり、本人の拡張された身体としてみなされているといえる。箱男は、身につけた持ち物について、「なにか自分の持ち物につかまっていないうと、風に吹き飛ばされそうで不安なのだ。」(『箱男』p.65.)と感じている。

安部の小説『終わりし道の標に』(1948, 1965)¹⁴⁾では、故郷を求めつつもたどり着けない主人公が、小説の終わりで、自身を「終わりのない有限という矛盾の、測量技師」(全集19『終わりし道の標に』p.427.)にたとえている。ここでの測量技師とは、土地の中で、故郷を求め続ける男のたとえである。同じように、カフカの晩年の作品『城』(1922)でも、所属を求める男が、測量技師として城の領内に現れる。城の領内は、城という官僚組織とその支配下の村からなる。そこは、城の組織が村を支配し、あらゆることを規定している。村の住人は、城の組織(役人)に服従し、顔色をうかがって生きている。そのような村に、突然部外者として現れるのが、主人公のKである。彼は、追い出されそうになるが、自分は城に呼び出されてやってきた土地測量技師であると主張し、村に住む権利を要求する。この村は、「客を必要としない」¹⁵⁾ ところであり、Kは、どこに行っても邪魔者として扱われる。Kは、この村、あるいは城の領内への所属を持たない男である。所属を持たないので彼は、そこで通用する相互保証としてのルール之恩恵も受けることができない。彼は、何も確かなものを所有することができない。所属もなく、なにも所有できないKは、村の女性フリーダを恋人とすることで、所属を得るための手がかりとしようとする。村とは、土地に根ざして生きる、移動をしない人間たちの集団である。そこは、長年のルールが通用し続ける、変化や動きのない世界である。外から来た、ルールの外にいる人間だけが、改革の可能性を持つのである。

Kは、自分が土地測量技師であると主張する。測量技師とは、土地を切り分け、新たな所有関係を作り出す仕事である。しかし、村人たちは測量技師を必要としていないという。古くからの大地に根ざした彼ら村人には、新たな境界など必要ないのである。Kは、土地を測量する部外者である。土地を手に入れたいの、彼は測量しかできない、観察者である。これは『赤い繭』において、繭になった男が、そこに住む者としての自分を失うことにも似ている。繭になった男とKとは、社会という集団の部外者である。それは、社会へのつながりのなさを意味し、社会の提供するはずの保護を受けることができない状態である。それは同時に強さでもある。彼らは、社会のルールの外にいて、ルールに縛られることもない。カフカも安部も、そのような外部にいる者=異端者に可能性を見出しているのである。

4. カフカと安部、所属の問題

カフカと安部に共通しているのは、都市に生きる人間の所属の不確かさである。未完の小説である『ある戦いの記録』の一部として書かれ、のちに雑誌に発表された短編小説『祈る男との対話』(1904)の中でカフカは「確かな陸の上での船酔い」¹⁶⁾という言葉を書いている。これは、都市に住む男が感じた、地面の上であって不安定な状態を示す言葉であった。『ある戦いの記録』では、都市での生活の不安定さ、人間と自然との奇妙な関わりがテーマとなっている。若い頃のカフカには、都会での生活は、たとえ陸の上によいと、不安定な状態に感じられていたといえる。都市の中の表層的な関係の中に生きること、¹⁷⁾それが「陸の上の船酔い」の感覚である。安部もまた、小説『箱男』の中で同じような表現をしている。「心の方向感覚の麻痺は、箱男の持病である。そのたびに地軸が揺れ、船酔いに似た吐き気にさんざん苦しめられる。」(『箱男』p.25.)ここでも、都市の中で生きる人間の感じる不安定さが、表現されている。このような感覚は、カフカと安部に、あるいは現代の都市に生きる人間に、共通するものかもしれない。安部は、そのような都市における人間の不確かさに、積極的な意味としての、土地に縛られずに生きる「内なる境界」を見ている。沼野は、「内なる境界」を、次のようにまとめている。「ここで安部公房が言う<内なる境界>とは、要するに、<移動性>を身上とする現代の<都市>のことである。根無し草の<異端者>を大量に抱え込み、人間の移動効率、人間関係の多角化、無名性といったことを本質的な特徴とする<都市>は、<定着>の基盤の上に成立した国家にとって不都合で許し難い存在でしかない。」¹⁸⁾ 安部は、ユダヤ人の性質に、土地に根づいた生活に対する、異端性を見ている。彼は、カフカの中に農村から切り離され

たユダヤ性を見て取り、カフカを都市生活者であると考え、そこに共感を示している。彼は『内なる境界』の中で、カフカやユダヤ人の問題を挙げながら、都市と農村の関係について触れている。現代の国家の中心となる都市は、農村のように土地に根ざした生活が行われているわけではない。にもかかわらず、社会には常に農村への憧れがあり、民族の根源に農民性があることを指摘している。

このような視点からカフカの『城』を見ると、村とは、定住者だけの世界である。そこにあるのは「大地信仰」であり、外から来たKは、異端者として排除されようとする。それは、ユダヤ人の運命でもあった。ユダヤ人とは、その置かれた環境から、歴史の中で制限された所属と所有しか許されなかった民族である。カフカは、晩年に知り合いになったチェコ人ミレナへの手紙の中で次のように書いている。「ユダヤ人たちの不安定な立場、自身の内部でも不確かで、人々の間にあっても不確かな立場のことを考えれば、何よりよくわかることですが、彼らには、自分たちが現に手にしているもの、ないし、もう歯の間に入れてあるものしか、所有していると考えることが許されませんし、さらには、手にしている明白な所有物しか彼らには生きる権利を与えてくれず、一度失われてしまったものは二度と手に入ることはなく、永久に彼らからうれしように泳ぎ去ってしまうのです。」¹⁹⁾ 確かな所属が得られない以上、ユダヤ人は不安定な立場にあり、確かなものを「所有する」することが困難な民族であった。特にそれは、土地の所有に関する制限として、歴史的に現れていたことである。

カフカは、都市に生きる人間の不安定さを表現してきたが、それはブラハに生きるユダヤ人の状況にも関わることである。カフカと同時代のブラハに生きたアイスナーは、当時のブラハのユダヤ人の状況を次のように分析している。「だが、チェコ人から見れば、ドイツ系ユダヤ人は三つの意味で異邦人であった。すなわち、教義もしくは純血種に基づくユダヤ人として異邦人であり、プロレタリアートと小ブルジョアの群集の中で、おおむねに不自由もない、裕福な、ときには大金持の市民として異邦人であり、そして第三には、<ドイツ人>として異邦人であった。」²⁰⁾ ブラハに生まれ、ブラハに育ったカフカは、本来故郷のない人間ではない。しかし、チェコ人の土地に生まれドイツ語を話すユダヤ人であることが、彼に故郷喪失感を持つことを強いてきたのである。

安部が論じているのは、実際のユダヤ人についてというより、社会的言説の中で作り上げられていった、「ユダヤ的なもの」である。安部は、ヒトラーが、新しいドイツを作るために利用したイメージが、結局は土地、農

民性でしかなかったことに注目している。ヒトラーは「よきドイツ農民層のなかに、血統正しきドイツ民族の存在を認めた」(『内なる境界』p.207.)のだと安部は指摘している。そして、「ユダヤ人とは、土地に定着できなかった者のことである」(『内なる境界』p.216.)と定義し、「ほとんどすべての時代にわたって、あらゆる国の反ユダヤ主義者たちが、まず例外なしに<正統な国民>のイメージを農民的なものとして描き出し、逆に都市的なものに諸悪の根源を見ていたという事実」(『内なる境界』p.217.)があったことを指摘している。

カフカにとって、農村は関係の薄い場所であり、それだけにあこがれの場所でもあった。都市の住人として生きていたカフカであったが、農村や自然に囲まれたサナトリウムなど、緑の多い場所で休暇を過ごすことがあった。また彼は、1913年から仕事の終わった後の時間を利用して、プラハ郊外の農園で働き始める。彼は、積極的に農村や農業とのつながりを求めていたといえる。1917年の日記には、農村に滞在していた時に会った農民たちの印象を書いている。「農夫たちが私に与える印象、それは農業に逃げ込んだ貴族たちといったところで、彼らはそこで大変賢明に、へりくだって彼らの労働を組織した結果、事物全体に一分のすきもなくびったりはまり込み、その幸福な死の瞬間まで、どんな横揺れや船酔いからも守られているのだ。この地上の本当の住民。」²¹⁾ カフカは、農民たちを土地に根ざした、理想的な生き方をする人間と考えていたことがわかる。カフカの妹オットラは、両親に反対されながらも、プラハ郊外の農業学校で学んでいる。この試みに、兄であるカフカも興味を持ち、積極的に援助しているが、都会で育ち、チェコ人のように先祖伝来の土地を持たないカフカたちにとって、農業は学校で学ぶという形でしか近づくことのできないものであったともいえる。ユダヤ人には、先祖伝来の土地を耕して生きる農民のような、土地への強固なつながりを持つことができなかったのである。

その中で、カフカの生きていた20世紀初頭のヨーロッパのユダヤ人たちの動きとして、シオニズムがある。それは、歴史の中にある土地を再び取り戻そうという動きであった。当時すでに、パレスチナへの土地を購入する形での移住が進んでおり、現実味を帯びた運動として、ヨーロッパに住むユダヤ人にとって、無視できないものとなっていた。カフカは、少なくとも世俗的な、ユダヤ人国家建国に向けたシオニズムに対しては、関心は持っていたものの距離をとっており、懐疑的であったようである。

しかし、晩年になるとカフカは、パレスチナという、かつてのユダヤ人の故郷であった土地へ行くことを希望

安部公房から見たユダヤ人作家としてのカフカ

するようになる。カフカは、シオニズムの動きには否定的であったかもしれないが、故郷と呼べる土地に生き、素朴に暮らすことに憧れていたのである。そこは、(伝説によれば)ユダヤ人に土地所有の認められた場所であった。それは、都市の住人として、またユダヤ人として、カフカが得ることができなかった、土地につながった生活のできる場所であった。一方、現実のシオニズム運動では、即物的な面が強かった。『ユダヤ人国家』によってシオニズムの方向性を決めたヘルツルは、必ずしもそのような精神的な農耕への結びつきを求めている。ヘルツルは、「ユダヤ人たちを農民化しようと欲する者は、奇妙な誤謬にとらわれているのだ」²²⁾とし、「農業問題とはまた単に機械の問題でもある」²³⁾と述べている。カフカの生きていた時代のシオニズムとは、宗教的というよりは、政治的手法によって、実際にユダヤ人の国家を作り出そうという非常に現代的な運動であり(伝統的ユダヤ人の中には、反対する者も多くいた)、それがカフカに、熱心なシオニストになることをためらわせていたのかもしれない。結局、カフカの夢であったパレスチナへの移住は、病気の進行によって、実現することがなかった。

5. 「大地信仰」とクレオール

カフカは、自身と世界とを結びつける糸として、故郷、土地へのつながりを求めていたといえるが、それを生涯見つけることができなかった。カフカも安部も、ともに故郷を持たないという感覚を持っていた。彼らはともに、統合の糸のない時代、状況に生きていたといえる。ところで、山中は、故郷や大地とのつながりとの関係について、カフカと安部の方向性の違いに注目した。彼は「カフカと安部公房は、定着と流動というまったく相反する方向」²⁴⁾を目指していたのであると捉えている。故郷のなさ、カフカの場合、農業への、土地への安定した帰属への関心へとつながっていた。一方安部の場合は「ただ、本質的に、故郷を持たない人間だということは言えると思う。ぼくの感情の底に流れている一種の故郷憎悪も、あんがいこうした背景によっているのかもしれない。定着を価値づけるあらゆるものが、ぼくを傷つける。」(全集20『消しゴムで書く一私の文学』p.86.)というように、「憎悪」とさえいわれるような想いとなっていた。ここでの「故郷憎悪」とは、実際の故郷である日本に対する具体的な憎悪というより、偽りの(虚構の)農民性に基づく「大地信仰」への憎悪といえる。沼野は、「このように定着を拒否し、あくまでも流動し、生成し続けるものとして<世界>を見ようとする志向は、安部公房自身を一生とらえていた、ほとんど一種の固定観念^{イデー・フィクス}だったのではないだろうか」²⁵⁾と述べている。しかし、このような

安部の思想は、どうして生まれたのだろうか。ユダヤ人カフカにとって、イスラエル建国以前に生きた人間として、故郷とは幻想の中にしかないものだった。一方安部は、あまりに簡単に故郷としての「日本」を回復してしまったのかもしれない。安部は、日本に生まれているが、幼少期を戦前から戦時中の旧満州で過ごしている。満州で中学を卒業した後、1940年より日本で旧制高校に通い、その後大学の医学部に進学しているが、1944年に家族のもとに戻り、満州で敗戦を迎えている。この若い頃の度重なる移動の体験が、安部にとって、故郷を曖昧なものと感じさせる要因となっていると考えられる。戦後に、彼は大陸から日本に帰ることができたが、そこは生まれた土地であり、自分の血縁が住む土地であり、誰からも追い出されることもない、自分の土地(=故郷)のはずである。戦中と戦後では、日本はあらゆる面で大きく変わっている。しかし、そこを故郷と呼ぶことは自明のこととして扱われ、誰も故郷とは何か、ということに疑問を持たない。しかし、満州での生活と、戦中から戦後への混乱と変化が、安部に日本を故郷と感じさせなかったのかもしれない。

安部は、いくつか旧満州を題材とした作品を書いているが、その主人公たちは、共同体への所属意識が希薄であるように見える。大陸にいる「日本人」である彼らは、しかし日本人としての誇りや所属意識を表すことはない。日本の敗戦について悲しむといったところもない。どこか、社会に、生きることに無関心な状態である。彼らは、何らかの所属を求め、しかし所属のない=故郷のない状態のまま、生きていくことになる。『終わりし道の標に』では、満州を舞台にしながら、故郷の喪失がテーマとなっている。主人公の少年は、故郷について次のように考える。「故郷とは、要するに自分の足で踏みかためられた環境の一角の名称にしか過ぎぬのではないか。それもただ、<かく在る>と言い続けるために……。」(『終わりし道の標に』p.383.)彼は、故郷である日本から遠く離れ、故郷とは何かという自明のはずのことが分からなくなる。

また、同じく大陸を舞台とした作品『けものたちは故郷をめざす』(1957)でも、主人公の少年は、故郷日本へ帰ろうとする。しかし少年は、結局「故郷」としての日本に帰ることができない。少年は、日本人の密輸船に監禁されることになる。船の男たちは、船の上も日本であると主張する。少年のたどり着いたのは、中途半端な故郷の一部であった。この作品を書いた安部は、すでに故郷日本にいるはずだが、日本に着いた少年を描かなかった、あるいは描けなかった。安部には、故郷を回復する少年を、思い浮かべることができなかったのか、あるいは抵抗があったのかもしれない。安部自身にとって曖昧であ

った故郷というものを、少年に与えることができなかったのである。

安部は、あるいはカフカは、確かな所属の感覚を持たない。リオタールのいう「大きな物語」²⁶⁾ が失われた状態に近いといえる。現代では、宗教やイデオロギーとしての物語は失われている。カフカも安部も、「大きな物語」を失った人間である。それはどの「物語」にも所属することがないことを意味する。安部は、満州国に生きることで、国（それは誰かの「故郷」にもなる）が人工的に作られ、消滅するのを目の当たりにしている。それは、国境とは何か、故郷とは何か、という疑問へとつながっていく。安部は幼少期から大人になる時代を、軍国主義的価値観に支配された、「日本」という「物語」の中に生きていたのである。統合の糸としての「物語」とは、個人に関わるだけでなく、国家観の形成にも関与している。戦時下の日本では、個人ではなく、集団としての「日本」が重要であった。安部は、そのような「物語」から、距離をとっているように見える。エッセイの中で彼は、「戦時中だって、多くの人は愛国心などを本気で信じていたわけではない。[...]ただ機械的にくり返しているうちに、いつかそんな気持ちになってしまったというだけのことである。」(全集 23『<裸の王様>とこども』p.359.)と書いている。安部の幼少期を過ごした満州とは、日本が国境線を引き作り出した国家である。それは日本人の理想を投影した、人工的であり、虚構的な国家である。安部は、国家という物語を否定する。安部が大人になり、創作活動を始めたときには、かつての日本という物語はなくなり、混乱を経て、新しい日本が生まれていた。大陸に育ち、国境の喪失に立ち会った安部にとって、何事もなかったかのように存続し続ける日本という枠組みそのものが不確かなものに感じられていたのである。

カフカの場合、「大地信仰」へのあこがれと、それを実現する動きとしてのシオニズムへの懐疑が見られた。シオニズムの目標となるイスラエルの建国には、「国家」という発想＝「大地信仰」が前提となる。シオニズムも、日本という「物語」も、必ずしも現実に即していなかったという点においては、理想的、どこにもないものとしてのユートピア、あるいは虚構的なものといえるかもしれない。それは虚構を現実にも強引に組み込み、世界を再構成する試みであった。彼らは、そのような「物語」に浸ることはできなかった。カフカを取り巻いていた「物語」（＝ユダヤ教、シオニズム、あるいはオーストリア＝ハンガリー帝国、チェコスロヴァキア共和国など）とは、それぞれ自分とのつながりを感じられない、彼にとっては一種の虚構のようなものであったかもしれない。同様に、安部にとって、「日本」という「物語」もまた、

自分とのつながりを欠いたものであり、虚構の中にしかなかったのかもしれない。

その中で安部は、砂漠や砂の持つイメージにあこがれを持つ。小説『砂の女』(1962)では、砂丘の中に埋もれつつある村が描かれる。舞台となる村では、家は砂丘の穴の中にあり、放っておけばすぐに砂に埋もれてしまうという。そこで、村人は砂をかき出すことで、かろうじて家を埋もれさせないでいるのであるという。ここでの砂とは、絶えず動き続け、人間の家や境界線を消し去ってしまう存在として描かれている。村人たちは、家の境界を守るために、砂をかき出すことだけを毎日続けている。彼らは、そのような無駄にも思える行為を日々続けているのである。一方、ほとんど収入源を持たないかに見えるこの奇妙な村は、砂を建設用に売ることによって、収入を得ているという。それは、村のためであるが、波瀾の言葉を借りれば、砂は「都市を拡大させる原料として機能し、集落の若者たちを吸収することで、集落の過疎化を一層深刻にさせているのである」²⁷⁾。村人に見られるのは故郷を愛する気持ちであるが、村を守ろうとする行為は、都市を拡大し、村人の減少を招くという、矛盾した状況をもたらす。村人たちは、作品の主人公である男による移住の勧めを拒否する。あくまで、砂に埋もれ続ける故郷を守ろうとする。それは、安部の批判する「大地信仰」そのものかもしれない。一方、故郷というものに対する執着のない者として安部が懂れるのは、そのような生き物のように動き、境界を消し去ってしまう砂であり、それは彼が育った満州の広い大地にもつながるものである。田中は、この作品を「定着観念から解放された人間誕生の物語」²⁸⁾と把握し、そこに安部の「内なる辺境」の概念との共通性を見ている。安部が愛したのは、土地への定着を意味する農民的ではなく、流動的な砂漠であった。

『箱男』において、箱男になることは、都市の中に隠れ、「異端者」になる方法であった。安部は、そのような異端者の持つ越境性にこそ生き方を見出していくようになる。安部は晩年にいたり、国境を越えた文化を作り出すクレオールに関心を持つようになっていく。安部はクレオールを、「辺境における《異文化の接点》で起きた現象」(全集 28『クレオールの魂』p.367.)と捉え、そこに可能性を見ている。安部は、大江健三郎との対談の中で、大江の質問に対し、次のように答えている。(全集 29『対談』p.77.)

大江 安部さんは、国家、民族にはもちろんのこと、文化的共同体にも義理を感じないわけ。

安部 そんな義理よりは、クレオールの可能性にひ

安部公房から見たユダヤ人作家としてのカフカ

かれます。解発される機会を待ちながら、DNA の中で眠っている文化の可能性。

安部がそこに見たのは、人種や国境に縛られない、力強い文化の創造性であった。安部の生きた時代は、そのようなクレオール文化が、現代的生き方として認知され始めた時代であったといえる。島田雅彦は、リービ英雄との安部をめぐる対談の中で、安部とクレオール文化について次のように述べている。

[...]まさにクレオール文化のある場所、つまり具体的な例は中南米などに見られるけれども、そこにおいて自分の故郷のようなものを見た。言うなれば文化に固有なものがあり、それがこういうものであるというのは、あくまで幻想に過ぎなくて、常にある影響関係あるいは力関係の中で変えられ、潰され、消えてしまうものである。ただし、そこで彼は決して悲観しないんですね。むしろ、それを歓迎するわけです。まさに固有のものなんていうものはないのだと、一種のアイデンティティ神話に対するアンチテーゼという、分かりやすい立場だったと思いますけどね。²⁹⁾

安部は、故郷に安住する生き方を嫌い、クレオールの境界なき文化へ傾倒していく。一方カフカは、都市での生活を続けている。結局、カフカは土地に根ざした生き方ができなかった。彼は代わりに、文学に生涯を捧げた。それは、彼には持つことができなかった宗教や故郷などの「物語」の代理物であるかのように機能していた。安部は、そのようなカフカにクレオール性を見出している。「たとえばカフカやベケットのような先例もある。伝統からはかぎりなく遠い、クレオールの魂を思わせる中性的な文体で地面を掘りすすんだ作家たちだ。だからこれからは書物の時代なのかもしれない。内なる辺境への探索には、なんと言っても書物が一番だろう。」(『クレオールの魂』p.375.) 安部の評価するクレオール性とは、ユダヤ人作家カフカが、不確かな所属の中で先進的な、「現代」を描いた作品を書いてきたことに見出される。そのようなカフカの特徴とは、ドゥルーズ、ガタリがカフカ論の中で評価しているように、カフカの作品の登場人物たちが、固定した社会システムから抜け出そうとする動きを持っている点である。彼らはカフカの作品の中に、さまざまな既存の構造(家族や社会など)から抜け出す登場人物たちを発見し、それを、領域化されたものを「非領域化」³⁰⁾する動きとして評価している。それは、常に確定していく何らかの境界線を否定し続けることである。先ほど見た『城』のKとは、都市の中で「内なる辺

境」を見出す「異端者」であり、それまでのルール(そこには国境も含まれる)、つまり安部のいう、古い「大地信仰」を破壊する可能性を持つはずの存在である。安部がカフカにひかれるのも、カフカの作品の持つ、そのような動きにこそあるといえるだろう。

¹⁾ 安部公房の著作からの引用は、『安部公房全集』1~30, 新潮社, 東京, 1997-1999.から行う。以下、全集からの引用は、全集の巻数、作品、エッセイなどのタイトル、ページ数を本文中に記す。

²⁾ 有村隆広: カフカと安部の小説—『審判』と『壁—S・カルマ氏の犯罪』—, pp.145-170, 有村隆広・八木浩編: カフカと現代日本文学, 同学社, 東京, 1985. 有村は、両作品に裁判が見られること、助力者がいることなどの、多くの類似点を指摘している。

³⁾ Franz Kafka: Der Proceß. Hrsg. von Malcolm Pasley, p.7, Frankfurt a. M., Fischer, 1990.

⁴⁾ Ibid., p.61.

⁵⁾ ただし『訴訟』は、未完であり、章がどのような順番に並べられるべきなのかも不明なままである。カフカは、「終わり」と題された処刑の章を書いているが、他にも終章となり得るような章を書いているため、必ずしもこの作品が処刑で終わるとはいえない。ここでは、一つのあり得べき方向として、物語が処刑という結末に向かうと考え、考察を行っている。

⁶⁾ ウィリアム・カリー(安西徹雄訳): 疎外の構図, 新潮社, 東京, 1975.

⁷⁾ このような問題は、人間の「情報」が電子データとなり、容易に複製することができるようになった現代では、さらに重要度が増しているといえる。東は、個人情報インターネットなどの技術により、断片化し、拡散していく状況を論じている。[東浩紀: 情報環境論, 講談社, 東京, 2007.]

⁸⁾ 有村隆広: カフカと安部の小説—『審判』と『壁—S・カルマ氏の犯罪』—, p.159.

⁹⁾ 有村隆広: 安部公房の最初の作品集「壁」—フランツ・カフカとルイス・キャロルの影響, p.25, 言語文化論究 9, pp.19-38, 九州大学, 1998.

¹⁰⁾ Franz Kafka: Drucke zu Lebzeiten. Hrsg. von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann, p.283, Frankfurt a. M., Fischer, 1994.

¹¹⁾ Braun, Michael: „Hörreste, Sehreste“, Das literarische Fragment bei Büchner, Kafka, Benn und Celan, p.127, Köln; Weimar; Wien; Böhlau, 2002.

¹²⁾ Ibid., p.144.

¹³⁾ Ibid., p.141.

¹⁴⁾ この作品は、安部の最初の小説であるが、1948年に書かれた後、1965年に安部により改訂されている。本論では、改訂版を使用している。

¹⁵⁾ Franz Kafka: Das Schloß. Hrsg. von Malcolm Pasley, p. 24, Frankfurt a. M., Fischer, 1982.

¹⁶⁾ Franz Kafka: Drucke zu Lebzeiten, p.389.

¹⁷⁾ アンダーソンは、『カフカの衣装』において、交通、交際を意味する Verkehr という言葉をキーワードとして、考察を行っている。彼は、都市に生きたカフカの状況を分析する際には、衣装や Verkehr の意味するような、表面的な関係が重要であることを指摘している。[マーク・アンダーソン(三谷研爾, 武林多寿子訳): カフカの衣装, 高科書店, 東京, 1997.]

- 18) 沼野充義 : W 文学の世紀へ, p.80, 五柳出版, 東京, 2001.
- 19) Franz Kafka: Briefe an Milena. Hrsg. von Willy Haas, p.46, Frankfurt a. M., Fischer, 1952.
- 20) パーヴェル・アイスナー(金井裕, 小林敏夫訳): カフカとプラハ, p.32, 審美社, 東京, 1975.
- 21) Franz Kafka: Tagebücher. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Michael Müller, und Malcolm Pasley, p.840, Frankfurt a. M., Fischer, 1990.
- 22) テオドール・ヘルツル(佐藤康彦訳) : ユダヤ人国家—ユダヤ人問題の現代的解決の試み—, p.24, 法政大学出版局, 東京, 1991.
- 23) 同上, p.25.
- 24) 山中博心 : カフカと安部公房—その自我像、定着と流動—, p.143, カフカと現代日本文学.
- 25) 沼野, p.77.
- 26) ジャン=フランソワ・リオタール(小林康夫訳) : ポストモダンの条件, 書肆風の薔薇, 東京, 1986.
- 27) 波瀾剛 : 安部公房『砂の女』論—登場人物と「砂」、およびテキストとの関係をめぐって—, p.42, 日本語と日本文学 26, 1998.
- 28) 田中裕之 : 『砂の女論』—その意味と位置—, p.119, 安部公房『砂の女』作品論集 (石崎等編), クレス出版, 東京, 2003.
- 29) リービ英雄, 島田雅彦 : 幻想の満州, p.81, ユリイカ, 1994 年 3 月号, 青土社, 東京, 1994.
- 30) ジル・ドゥルーズ, フェリックス・ガタリ(宇波彰, 岩田行一訳) : カフカーマイナー文学のために, p.16, 法政大学出版局, 東京, 1978.

(受理 平成 23 年 3 月 19 日)